

會學濟經學大國帝都京

叢論經濟

號五第 卷十五第

月五年五十和昭

論叢

維新前後の開化思想……………經濟學博士 本庄榮治郎
限界生産力説と勢力の問題……………文學博士 高田保馬

時論

非常時局下に於ける日支の態勢……………經濟學博士 石川興二

研究

販路説の過剩投資説への發展……………經濟學士 青山秀夫
理想型の理論……………經濟學士 出口勇藏

アウグスチヌスの共同體思想……………經濟學士 澤崎堅造

說苑

蒙疆の人口と農業……………經濟學士 菊田太郎
國民經濟的概念と經營經濟的概念……………經濟學士 尾上忠雄
支那に於ける理想郷思想……………經濟學士 穂積文雄

附錄

彙報

外國雜誌論題

研 究

販路説の過剰投資説への發展

青 山 秀 夫

ツガン・バラノオスキイが販路説の發展として不比例説 (Disproportionalitätstheorie) を主張し、「近伏恐慌理論の父」(Vater der neueren Krisentheorie)¹⁾ の名に値する業績を残したことはよく知られてゐる。ツガンに於ては不比例説の論證はマルクスの擴張再生産表式に立脚するものであり、これまで主として資本主義崩壊の問題の観点より論ぜられ來つたが、然しその歸結、即ち資本の蓄積はどこまで行つても行詰らないといふ命題は、他面に於て、不比例説に有力な理論的論據を與ふるものとして景氣理論の問題と緊密に連絡し、かくて彼の所謂「古典學派の販路説とマルクスの再生産理論との綜合の試み」(Versuch einer Synthese der Lehren der klassischen Nationalökonomie über das zwischen der Produktion und der Konsumtion obwaltende Verhältnis und der Marschen Analyse der Reproduktion des gesellschaftlichen Kapitals)²⁾ は「輝しき第一級の業績」として現代景氣理論の主流のうちに今尙脈々たる生命を保つてゐる。謂はば、此のツガンの遺産に對して如何なる態度を採るか、は過剰投資説内部の決定的問題の一つに屬

1) Tugan-Baranowsky; Studien zur Theorie und Geschichte der Handelskrisen in England, 1901. Tougan-Baranowsky; Les crises industrielles en Angleterre, 1913. 鎌本博譯、英國恐慌史論。尙此の機會に、古典學派の恐慌理論について最近周到なる研究を惠まれたことを谷口吉彦(「恐慌理論の研究」)山口茂(「流通經濟の貨幣的機構」)兩教授に感謝したい。

する。此の意味に於て吾々はツガンの景氣學說を問題とするが、順序として先づ再生産表式による不比例說の論證より敘述を始めよう。

ツガンは生産部門を三分し、第一部門は生産手段を、第二部門は勞働者消費財を、第三部門は資本金消費財を夫々生産するとし、更にマルクスの不變資本・可變資本・剩餘價値の三項目に代ふるに生産手段價値(p)・勞賃(a)・利潤(r)を以てする。尙次の假定を設ける。假定一、凡ての部門を通じて $\frac{p}{a+r}$ の比率が保たれる。假定二、利潤の半分が貯蓄される。此の前提の下にツガンは次の表式を興へる。²⁾

第一表式(單純再生産)				
第一部門	720 p	+ 360 a	+ 360 r	= 1,440
第二部門	360 p	+ 180 a	+ 180 r	= 720
第三部門	360 p	+ 180 a	+ 180 r	= 720
	1,440	720	720	2,880
第二表式(擴張再生産)				
第一年度				
第一部門	840	+ 420	+ 420	= 1,680 (+240)
第二部門	420	+ 210	+ 210	= 840 (+120)
第三部門	180	+ 90	+ 90	= 360 (-360)
	1,440	720	720	2,880
第二年度				
第一部門	980	+ 490	+ 490	= 1,960 (+280)
第二部門	490	+ 245	+ 245	= 980 (+140)
第三部門	210	+ 105	+ 105	= 420 (-420)
	1,680	840	840	3,360
第三年度				
第一部門	1,143 $\frac{1}{3}$	+ 571 $\frac{2}{3}$	+ 571 $\frac{2}{3}$	= 2,286 $\frac{2}{3}$ (+328 $\frac{2}{3}$)
第二部門	571 $\frac{2}{3}$	+ 285 $\frac{1}{3}$	+ 285 $\frac{1}{3}$	= 1,143 $\frac{1}{3}$ (+163 $\frac{1}{3}$)
第三部門	245	+ 122 $\frac{1}{2}$	+ 122 $\frac{1}{2}$	= 490 (-490)
	1,960	980	980	3,920

此の表式を通じてツガンが語らうとするところは、要するに斯うである。成程蓄積によつて消費は減退し生産は増大する、然し増大した生産は自らその販路を創出する。消費財需要が減退しただけ、生産手段需要が新しく現はれるから、需要と供給との均衡は貯蓄によつて少しも攪亂されない。小麦の需要が減つて鉄鋼の需要がこれに代つて現れる、たゞ

2) Vgl. W. Sombart; Die Störungen im deutschen Wirtschaftsleben während der Jahre 1900 ff, in Schriften des Vereins für Sozialpolitik, CXIII, 1904, S. 130.
 3) Tugan; Studien, S. 27.
 4) Spiethoff; Schriften des Vereins für Sozialpolitik, CXIII, 1904, S. 222.

それだけである。上の表式について此のことを説明しよう。第一年度に於ては成程生産手段に於て二四〇、勞働者消費財に於て一二〇の超過が生じたが、此の超過は、第二年度に於ける生産擴張のための需要増加（生産手段及び勞働者消費財に於けるそれ）によつて完全に消化される。同様に第二年度の貯藏（生産手段に於て二八〇、勞働者消費財に於て一四〇）も亦第三年度の生産擴張にその販路を見出す。以下同様にして生産擴張は無限に進行する。かくて「資本主義的生産は自分自身で販路を創り出すといふ基本命題は、極はめて簡單ではあるが、社會的資本の再生産過程の理解が不十分な場合には反對を生じ易いものであるが、以上の圖式は此の基本命題を證明して剩すところなきものである。若し社會的生産の擴張が可能でさへあれば即ち生産力が擴張するに足るだけ存在するならば社會的生産が比例的に配分されてゐる限り (Bei der proportionalen Einteilung der gesellschaftlichen Produktion)、需要も亦生産擴張に應じて増大する筈である。蓋し此の條件の下に於ては新しく市場に現はれる商品は凡てこれ他の商品の獲得の爲の新しい購買力に他ならぬからである。」⁵⁾

此の論證が過少消費説に對する批判を意味することは明かであるが、ツガンによれば、それは亦、販路法則の古典學派的理解をも超えるものである。即ち古典學派は此の法則の説明に當つて、「貯蓄されただけ勞働者消費が増加し、従つて消費は貯蓄によりて減退せぬ。」(“What is saved affords subsistence to the workman just as much as what is spent.”)とし、生産擴張による勞働者消費の需要しか考慮しなかつたのに對して、此の理論は資本家階級の生産手段需要をこれに加へたといふのである。古典學派の販路説に對する此のツガンの理解は誤解とも云はれてゐるが、假にさうであるとしても、マルクスの用具によつて販路法則の理論的構造を明確にしたことは

5) Tugan; Studien, S. 17 ff. 邦譯, p. 293.

6) Tugan, Studien, S. 25, 邦譯, p. 213.

7) Robertson; Study of Industrial Fluctuation, 1915, p. 199.

ツガンの功績として認められねばならぬ。此の逐年的考察によつて始めて販路説に時間要素乃至隔時的依存關係が導入され、販路法則の内容は時間的長さを持つ過程のうちに繰り展げられたのであるし、かくて始めて一般的過剰生産の可能性の問題のより精確な論議の基礎が與へられるのである。^(注一)

さて以上の論證は不比例説に對して論據を與へる。上記によれば擴張再生産の圓滑なる進行は生産部門相互間に於て或る比例的關係が維持せられることを要求するが、生産が個人主義的に組織せられ、従つて計畫性を缺ぐと共に、生産が手段としてではなく、自己目的として行はるゝ資本主義社會に於ては、此の條件の満足は決して容易ではない。ツガンは一般的過剰生産の原因をこゝに求める。即ち、「社會的生產の配分に於ける比例性の缺如」(Mangel an Proportionalität in der Einteilung der gesellschaftlichen Produktion)が資本主義經濟の貨幣的機構を通じて一般化することによつて一般的過剰生産が生ずるとするのである。ツガンは要約的に云ふ。「吾々が既に明かにした通り、社會的生產が比例的に配分されてゐる限り、需要は商品の供給自體がこれを創り出す。然し乍ら完全な比例性を維持することは超え難き困難を含む。社會的生產の配分にして比例性を失ふならば、それは常に若干商品の過剰生産に導くが、然し一切の生産部門相互間には密接なる連絡が存するから、若干の商品の過剰生産は容易に一般的なる過剰生産に轉化する。市場は賣れざる商品で充満され、價格の崩落が生ずる」⁽⁸⁾

かくの如くツガンは一般的過剰生産の原因を生産部門相互間の不比例に歸し、更に此の不比例に對する責任を凡て資本主義的經濟機構に負はしめるのであるが、果して然らば景氣變動の週期性は如何にして説明されるか。若し不比例の原因が經濟制度自體のうちに存するとすれば、一般的過剰生産は寧ろ恒常的現象たる他ないので

8) Tugan, Studien, S. 31.

ないか。こゝに於てツガンは景氣變動の週期性の説明を専ら貨幣資本の蓄積過程の分析に委ねる。現代に於て貨幣資本の蓄積と生産資本の蓄積とが互に區別さるべき二つの過程であることはいふ迄もないが、貨幣資本の蓄積が常住に、間斷なく行はれるのと對比して、生産資本の蓄積乃至貨幣資本の生産資本への轉化が好況期に於て飛躍的に増大し、不況期に於て著しく停滯することも亦明かな事實である。ツガンは此の點に注目する⁹⁾。即ち、沈滞期にあつては、投資活動の減退と共に、謂はゞ假眠状態にある貨幣資本が逐次堆積されるが、此等の「貯蓄されたる貯蓄」の投資追求の欲求は時の経過につれて壓力を増大し、早かれ遅かれこれまで不振であつた投資活動（生産資本への轉化）の發展をもたらす。一度投資が始まれば、これまで抑制されてゐた貨幣資本の蓄積は堤を切つて産業界に流れ出す。此の助けによつて上昇過程が累積的に進行する。然し乍ら、勢の激するところ、生産資本の蓄積は過度に行はれ、「貯水池」、蓄藏された貸付資本が枯渴する。此の貸付資本の缺乏は恐慌をもたらす。かくて反動が襲來し、投資活動は再び萎靡し、貸付資本は次の好況を準備すべく堆積を始める。ツガンは此の機構を蒸氣機關に譬へて次の如く美しく説明してゐる。

「シリンダーの中の蒸氣の役割をつとめるものは貸付資本の蓄積である。ピストンに對する蒸氣の力が一定の大きさに達すると、それは抵抗に打克つ。ピストンは動き始め、シリンダーの端まで行く。次いで蒸氣が抜け、ピストンは以前の場所に還る。蓄積された貨幣資本は一定額に達すると、これと同様に産業の上に作用する。それは産業を動かし、次いで消盡され、産業は以前の状態に還る。此の事情の下では、恐慌が週期的に發せざるを得ないことは當然である。資本主義は常に同様な發展循環を辿るべき運命を持つ¹⁰⁾」

此の着想は恐慌の原因を資本缺乏に歸する點に於ては多くの先輩（例へば J. S. ミル）を持つが、沈滞期間中の貨

9) 參照、Tugan; Studien, Kap. VIII. 邦譯、p. 245. 以下。

10) Tugan, Studien, S. 251. 邦譯、p. 269.

幣資本の蓄積に所謂「蓄電池」的機能を認め、「貯蓄されたる貯蓄」を重要視し、明瞭にこれを定式化したことは恐らくツガンの功績として認められるであらう。¹¹⁾ 而して此の説明形式は其後若干の追隨者を見出し(レスキューール、シユビイトホフなど)、¹²⁾ 景氣理論上注目すべき一族を形成する。かくて此の景氣學說に對して何らかの呼名を與へることが便宜となるが、吾々はこゝに、アフタリオンに従つてこれを貯蓄學說 (theorie de l'épargne, "savings" theory) と名付けるであらう。^(註三)

(註一) 此の表式による論證とならんで、ツガンに於ては、販路說の概念的論證とも云ふべきものが行はれてゐる。それは「商品の絶對的貨幣價格の一般的騰貴(乃至下落)はあり得ても、相對的交換價值の一般的騰貴(乃至下落)はあり得ない、一商品の相對的交換價值の騰貴は他商品の相對的交換價值の低下を意味する」といふ周知の命題と同一論法によるのである。即ち甲商品の過剰生産は甲商品の價值を低下せしめるが、同時に亦乙商品に對する需要を増大し、従つてその生産を過少ならしめ、その價值を騰貴せしめる。従つて貨物經濟に於ては過剰生産も價格下落も部分的でしかない。ただ貨幣經濟に於ては、甲商品の價格下落は甲商品生産者の賣上高を減少し、従つて甲商品生産者の乙商品に對する購買力を減低せしめるが故に、過剰生産は一般化されて一般的過剰生産が生ずる。これがツガンの概念的論證である。(Trugan: *Statistik*, S. 4 ff. 邦譯、二四七頁以下) 然し乍ら吾々は此の説明を以て決定的であるとは考へない。蓋し此の説明は生産の結果の一部が資本化されて、謂はば迂回的に、需要となつて現れる場合の要時間的過程を捨象してゐるからである。吾々が表式による販路說の論證を重要視するのはかかる觀點からである。

(註二) Cf. A. Afallon: *La théorie de l'épargne en matière de crises périodique de surproduction et sa critique*, *Revue d'histoire des doctrines économiques et sociales*, 1909, p. 229 et seq. 尙、英譯名はロビンソン・ド・ラ・セ。^(Economic Journal, March 1914, p. 85) — アンナリオンは過剰生産恐慌に關する資本不足學說 (theorie du défilé de capital en matière de crises de surproduction) の一分派、然しその最も理論的なる分派として貯蓄學說を考へる。即ち、彼によれば、資本不足學說は(イ)貨金屬貨幣の不足に着目するもの、(ロ)銀行券の不足に着目するもの、(ハ)信用の不足に着目するもの、(ニ)資本不足として流動資本の缺乏を考へるもの、(ホ)貯蓄學說の五つに分たれるが、理論的に重要なものは

11) Cf. Mitchell, *Business Cycles*, 1927, p. 23.

12) J. Lescure: *Crises générales et périodiques de surproduction*, 3^e éd. 1923, p. 597 et seq. 尙 Spiethoff については別に詳論する。

最後のもののみであるとする。而して彼が貯蓄學説の代表者として擧げてゐるのは、ジュグラア、ツガン、シュビイト
ホフなどである。

二

ツガンが過剰投資説に遺したところのものは、以上によつて明かな通り、二重である。即ち、第一にマルクスの擴張再生産表式の利用に於て不比例説の論證を試みたこと、第二に所謂貯蓄學説の構想に基いて景氣のくずれを過剰投資乃至資本の缺乏によつて説明したこと、此の二つがツガンの過剰投資説に於ける貢獻である。勿論ツガンの景氣學説を全面的に検討するとすれば、問題は此の二點に止まらぬが、現代景氣理論との關聯に於て注目に値する論點は此の二つである。¹⁾

さて然らば、先づ第一に、擴張再生産表式による不比例説の論證はどう見らるべきであらうか。既述の如く、此の論證は販路説の論理的構造を極めて明晰に示すが、これを立入つて考察するとき、吾々は寧ろ次の結論に到達せざるを得ない。即ち、此の表式は販路説のために何ごともしるものではなく、寧ろ自然經濟に於て既に一般的過剰生産が可能であることを示す。従つて不比例説は此の表式からの必然的歸結ではなく、單に可能な歸結の一つに過ぎぬ、——吾々はかく考へるが、以下に於て吾々の此の見解を説明しよう。

先づ明かなのは、ツガンの表式自體が一般的過剰生産の可能性を最初から否定するものではなく、ただ如何なる條件の下に於て一般的過剰生産が不可能であることを示すに過ぎぬことである。然らばその條件は如何なるものであるか。

1) 尙 Tugan の景氣理論については Spiethoff の詳細なる検討がある。Vgl. Spiethoff; Die Krisentheorien von M. v. Tugan-Baranowsky und L. Pohle, Schmollers Jahrbuch, 1903 II, S. 331 ff.

此の點について注意すべきは、自然經濟に於てすら、それが個人主義的に組織されてゐる限り、資本形成過程と商品生産過程は連絡を缺ぎ、此の二つの過程は全く獨立に進行するといふことである。勿論、貯蓄によつて形成された實物資本は——吾々はしばらく自然經濟について話を進める——、利潤追求を目的とする以上、何時かは資本財に轉化すべき運命にある。然し乍らその轉化は即刻行はれる必要はなく、當事者が適當と認めるまでは商品貯藏の形態に於て待機する。他方に於て生産過程は、此の商品貯藏の狀況と無關係に、企業者の決意によつて進行せしめられる。時として企業者の需要は資本財の供給を超えるであらうし、時として供給が需要を超過し商品貯藏は正常なる貯藏期間を超えて供給者の手許に賣残る。此の意味に於て資本形成過程と生産過程との關係の調整を保證するものはどこにも存しない。ところでツガンの表式は此の資本形成過程と生産過程との間に一定の關係が成立することを要求してゐる。今第二表式の第一年度と第二年度との間の關係について云へば、第一年度の資本形成三六〇に應じて第二年度に於ては恰度それだけの生産擴張が行はれることとなつてゐる。勿論個人主義的經濟組織の下に於ては此の關係は常に攪亂の危險にさらされてゐるのであるから、此の意味に於て此の一致は此の表式が前提する條件——或は此の條件の性質上隔時的均衡條件と呼んでもよい——の一つと解されねばならぬ。

然し今吾々がただ「資本形成」と呼ぶに止めた過程は尙一層立入つて分析されることを要する。しばらく上の表式の第一年度について話を進めよう。此の年度に於ては、一方に於て利潤の五〇%即ち三六〇の貯蓄が行はれると共に、他方に於て三六〇(生産手段二四〇勞働者消費財一二〇)の商品貯藏が現はれた。而して吾々は、上に於て「資

本形成」といふ場合、貯蓄と商品貯藏との此の二つの過程を無差別に考へたのであるが、然し此の二つの過程は果して統一に行はれるであらうか。此の場合、先づ貯蓄は個人の決意を表すもの、従つて現實に於てそれより如何なる結果が生ずるかは市場の状況による修正作用をまつて始めて決定さるべきものと考へられねばならぬ。換言すれば、それは「自發的貯蓄」を意味するものでなければならぬ。このことを何よりも明瞭に示すものは、先に五〇パーセントと假定された貯蓄率の概念である。蓋し此の概念は、夫自體有意義なる爲には、國民の多かれ少かれ持續的なる心理的性質を表現するものでなければならず、その時々の変轉極まりなき市場の状況によつて修正された結果を示す如きものではあり得ない筈であるからである。次にその對偶たるところの同一年度内の商品貯藏について云へば、此の商品貯藏機能を負擔する人々、即ち假に吾々が「商人」と呼ばうとする人々は、自然經濟に於てすらも、此の貯蓄者と分化し得る。此の二つの範疇の人格が同一人格であるべき必然性は存しない。従つて一方に於て三六〇の貯蓄が行はれるとしても、他方に於て如何程の商品貯藏が行はるかは、それと無關係に全く「商人」の決意に依存するであらう。換言すれば、貯蓄が如何なる實質的資本形成を齎すかは、商人の決意を俟つて始めて定まる。今吾々は此の商人の商品貯藏の決意を「貯藏投資」と呼んで、上記の企業者の生産擴張のための投下資本の増加としての「生産的投資」から區別することとしよう。然るとき吾々は以上の考察を要約して、ツガンの表式は年々の貯蓄が該年度の貯藏投資と一致することを前提するものである、といふことが出來よう。貯蓄が完全にその實物資本形成的効果を發揮し得るのは此の前提の下に於てである。

いまツガンの表式の今一つ的前提、即ち夫々の年度を通じて費用法則が妥當し、此の意味に於て生産の均衡が

年度中成立するといふ前提をしばらく度外視するとなれば、以上の二つの条件が満足されることは、此の表式の成立の爲の必要且充分なる条件と看做されるであらう。蓋し此等の二つの前提が上記の假定とも與へられるときは、夫々の度数が夫々の年度に於て取る値は一義的に確定するからである。決定さるべき未知数は、上記の三つの部門に於ける生産手段價值(p_i)、勞賃(a_i)、利潤(r_i)及び生産物價值(w_i)の合計十二個である。(添字 i は部門を表す。)

先づ表式自体が表示する費用法則は此ら三つの部門に於て夫々成立つから、三箇の方程式が得られる。記號的には (1) $p_i + a_i + r_i = w_i$ である。更に假定(1)により (2) $p_i : a_i : r_i = 2 : 1 : 1$ (=1, 2, 3) であるが、此の

条件は亦、六個の方程式を與へる。従つて尙三個の方程式が補はれることを要するが、此の方程式は上の二つの前提から與へられる。即ち、貯蓄と貯藏投資とが一致するといふ条件は (3) $(w_1 - 2p_1) + (w_2 - 2a_1) = \frac{1}{2} 2r_1$

と云ふ形の一つの方程式を與へ、生産的投資が前年度の實物的資本形成と一致するといふ条件は (4) (今年度の $2p_1$) - (前年度の $2p_1$) = 前年度の $(w_1 - 2p_1)$; (今年度の $2a_1$) - (前年度の $2a_1$) = 前年度の $(w_2 - 2a_1)$

或は一層簡單には、(4') $2p_1 =$ 前年度の w_1 ; $2a_1 =$ 前年度の w_2 なる二個の方程式を與へる。かくて方程式の数は未知数の數と一致し、一定の端初年度が與へられれば、その後は年々歳々一義的に確定した形に於て *ad infinitum* に發展が進行することになる。

以上に於て吾々はツガンの表式の構造を分析したが、次に此の分析を手懸りとして彼の不比例説の論證を吟味しよう。先づ吾々は此の分析に基いてツガン自身が均衡条件として要求した「社會的生産の比例的配分」が何であるかを精確に規定することが出来る。即ち、先に方程式(1)(2)(3)(4)で示した条件が同時に満足されるためには、各

部門間の生産の間に一定の比例的關係が維持されることを要するが、吾々はこのことを以て社會的生産の比例的配分の概念が意味するところであると解する。²⁾ところで然し社會的生産の配分が此の意味に於て比例的に維持される場合、資本擴張は圓滑に進行し得るであらうか。解答は否定的でなければならぬ。このことは、上の表式に於て第二年度に第一年度に於けると全く同様の生産が行はれた場合を考へれば、直ちに明かとなる。成程此の場合、比例的配分は維持されるけれども、然し販路は第一部門第二部門を通じて一般的に硬塞する。生産が擴張されぬため、第一年度の貯藏は第二年度に於て賣捌かれぬのである。然らばその理由は何處に存するか、このことも亦以上の分析によつて明かである。第一部門と第二部門との比率が二對一であることはツガンの要求する條件であるが、此の條件は擴張再生産の進行のための必要條件ではあつても充分條件ではないのである。成程上記の如く前年度の實物的資本形成と今年度の生産的投資とが一致するためには、第一部門と第二部門とは二對一の比率を維持すべきであらう。然し乍ら後の條件は必ずしも前の條件を意味しない。即ち前の條件は後の條件を含むけれども、後の條件は前の條件の全てを含むものではない。更に換言すれば、實物的資本形成と生産的投資との一致といふことは、上記の(4)が意味する限りに於ては、各部門の生産の相對的比率を規定するのみならず、その絶對的規模をも規定するものであるのに反して、社會的生産の比例的配分といふことは單に相對的比率にしか關しないのである。ところで以上の表式の分析が明かにしたところによれば、夫々の年度の生産が單に相對的比率に於てのみならず、その絶對的規模に於ても一定の條件を満足することが、再生産の圓滑なる進行乃至生産擴張に應ずる販路の確保のために必要なのである。此の意味に於て、社會的生産の配分が比例的でありさへすれば、

2) 上記の方程式(4)、(3)、(1)によつて $w_1 : w_2 = 2 : 1$ でなければならず、更に此の關係及び(1)(2)を(3)に持ち込むことによつて $w_2 : w_3 = 7 : 3$ なる關係を得る。尙 Spiethoff が示した不比例の解釋も上記の吾々の理解を裏書する。(Vgl. A. Spiethoff; Der Kapitalmangel in seinem Verhältnisse zur Güterwert, Schmollers Jahrbuch, 1909 IV, SS. 51-56.)

需要も亦生産擴張に應じて増大する、とするツガンの主張は誤謬である。此の歸結は決して上の表式からの正しい歸結ではないのである。——以上の吟味によつて、恐慌は不比例乃至部分的過剰生産からしか起り得ぬとするツガンの主張が謬りであることも亦明かである。假に生産が比例性を維持するとしても、生産の絶對的規模が實物資本形成に劣る場合に於ては、一般的過剰生産が可能である。此の意味に於てツガンの表式は一般的過剰生産の不可能を示すものではなく、高きそれが如何なる條件の下で不可能であるかを示すに止る。即ちそれは販路説の論證に役立つものでは決してない。^{註三)}

以上のツガンに對する批判を「層明瞭ならしめるために、吾々は吾々の主張をシュビイトホフに對する批判の形式に於て展開しよう。彼も亦「營利資本の形成と資本財生産との間の聯絡が完全に缺如せること」(die völlige Verbindungslosigkeit der beiden Vorgänge der Bildung von Erwerbskapital und der Hervorbringung von Kapitalgütern)を自然經濟に於ける攪亂の原因として認める。「營利資本の蓄積は實物的資本財の生産とは無關係に行はれ、後者の生産者は蓄積過程について些も知るところがない。更に亦、新しく蓄積された資本が事實生産に使用されるや否や即ち資本財購買のために使用されるや否や、も不確定である。若し實物的資本財の生産者にしてその生産物の價値實現、即ち販賣に關して安全たらんとするならば、同時に營利資本の新しい蓄積がどれだけ行はれ、そのうちどれだけかその生産物を買ふ爲に支出されるかを該生産者は精確に知ることを要した筈である。該生産者が此の知識を缺ぐところに於ては、生産物の一部が或は資本形成が少な過ぎるため、或は蓄積されつつ使用されぬものが存するため、賣残る危険が生ずる。」³⁾以上上記の貯蓄と貯藏投資との區別をしばらく度外視する——此の點は後

3) Spiethoff; Schriften des Vereins für Sozialpolitik, CXIII, 1904, S. 221. 尙ここでは、營利資本、生産資本の概念に對して Privatkapital, Sozialkapitalなる表現が用ひられてゐる。

に論ずる——とすれば、此のシュピイトホフの指摘に對して吾々は言葉を加ふべき必要を持たぬ。然し乍らシュピイトホフは販路説を固執し、部分的過剰生産しか可能でないと主張する。「需要の全體と供給の全體とは恒に過不足ない筈である。兩者は互に制約し合ひ、一は他なくして考へ得ず、ともに同一現象の二つの側面に過ぎぬが故に、このことは必然である。此の一致のための前提は勿論、内部的區別を缺く全體としての財の集りが眼中に置かれてゐることである。若し此の財の集りの内部に種類の相違が現はれるとすれば、全體として過不足なきためには、需要される種類と供給される種類とが過不足なきことを要するか、かかる場合が財の世界に齎されるのは資本形成に依てである。資本財及び消費財がどれだけ需要されるかは資本形成に依存し、資本財及び消費財がどれだけ生産され供給されるかは需要の見込に依存する。ところで若し此の兩者が一致しないならば、そこに攪亂が生ずる筈である。資本財の生産が營利資本の形成に不足するならば、營利資本の一部は遊ばねばならぬ。また資本財の生産が營利資本の形成を超過するならば、資本財の一部が賣残る。資本財の過剰には消費財の過少が、また資本財の過少には消費財の過剰が對をなす。」⁴⁾此の主張、自然經濟に於ては一般的過剰生産なしとする主張に對しては、吾々は反對である。自然經濟に於ても、資本形成が過剰ならば、一般的過剰生産が可能であることを、以上の分析の結果として吾々は主張する。かくて、假に景氣のくずれが不比例から説明されるとしても、その理由は販路法則以外に求められねばならぬこととなるし、またこれによつて貨幣的機構のうち一般的な過剰生産の原因を求めんとする貨幣的景氣理論への傾向が豫防されるであらう。

(註一) このことは「豫備的模索の假定が満足されるならば」といふことと略々同一の意味を有するであらう。(拙稿「ワルラスに

4) A. Spiethoff; Die Ordnung des Geld- und Kapitalmarktes, Schmollers Jahrbuch, 1909 II, S. 18.

於ける動學化の問題」、經濟論叢第四七卷第二號參照。尙此の問題に關して安井教授は經濟學論集第十卷第一號第二號第三號所掲の論文「均衡分析と過程分析」に於て極めて周到なる分析の上に新しい創意的結論を導出されつつある。此のワルラス的假定の下に於ては、ツガンの假定(資本構成の一定、利潤率一定、貯蓄率一定)は撤去し得るが、それは亦同時に吾が問題とする貯蓄と「貯藏投資」との均等及び實物的資本形成と「生産的投資」との均等の假定をも併せ包括する。

(註二)

高田博士は販路説を批判してかう主張される——一體販路説は靜態に於て妥當なるものである。靜態を別にしては此の原則もそのまま妥當ではあり得ない。擾亂の事情が作用するところには、それは十分に支配し得ず、従つて生産に應ずるだけの販路ありとは認め難い。(景氣變動論、三五九頁以下)私の立場も亦これと同様である。私は、ツガンの表式自體が示すところの、擾亂の要素として貯蓄と投資との不均等を指摘したのである。然し乍ら、私は此のツガンの表式は販路説の論證として成立せぬにしても、消費過少説批判としてはこれを認め度い。即ち『資本財生産と消費財生産とは、貯蓄率の大小とは無關係に、一定の比例關係を維持せねばならぬ』といふのは消費過少説の出發點をなす基本命題であるが、ツガンの表式が示す様に、均衡維持のために此の二つの間に於て成立すべき比例關係は貯蓄率の函數であるからである。ケインズが適切に指摘したやうに、「禍ひの根本は、貯蓄の大きさに相應するだけ大きな投資が行はれないことにあるのであつて、貯蓄が如何に大であらうとも、それに應ずるだけの投資が行はれるならば、問題はない」(Keynes, A Treatise on Money, Vol. I, p. 179.) のやうである。

(註三)

更に今一度、シビイトホフが不比例の本質について最も明快に語つたところを引用することを許されたい。「商品自體の相互關係にとつて過剰生産(及び資本不足)は何を意味するか?それは(資本主義社會に於ても社會主義社會に於ても)過剰と缺乏(Uberfluss und Mangel)とを同時に表す。一切の補定財に於ける關係は、片方だけ無くなつた一組の手袋と同様である。無くなつた手袋は缺乏であるが、一つだけ残つた方もそれだけ使ふわけには行かぬから、過剰である。過剰生産に見舞はれた財についても全く同様である。その補定に必要な財が得られぬ以上、その財は過剰である。しかし補定財は、その過剰生産に見舞はれた財の利用に必要なものであるから、缺乏してゐるわけである。従つて同じ状態が一方から見れば過剰であり、他方から見れば缺乏であることとなる。」(Spichoff; Der Kapitalmangel in seinem Verhältnisse zur Güterwelt, Schmollers Jahrbuch, 1909, III, S.44.)

III

ツガンの景氣理論の今一つの特徴は貯蓄學説に存するが、此の點については、ここでは簡單に論ずるに止めた
い。——ツガンの貯蓄學説は明かに景氣變動を貨幣側から説明せんとするものである。即ち此の立場は循環の原
因を貨幣資本の運動に求め、その時々の市場の狀況をその時々に於ける貨幣資本の蓄積の大きさによつて説明せん
とし、投資即ち貨幣資本の生産資本への轉化の誘因を未分析に放置してゐる。シュピイトホフの云ふ如く、「ツ
ガンは Hausse-theorie を興へない。何となれば貸付資本の固定資本への急激大規模なる轉化の第一歩が如何にし
て始まるかは、問題の焦點をなすに拘はらず、彼は毫もこれを説明し得ぬからである。」然し彼の景氣理論はその
實體に於てかくの如く貨幣的であるにも拘はらず、原理的には彼は貨幣側からの説明を峻拒する。少くとも信用
側から説明することはこれを峻拒する。彼は主張する。「信用、即ち資本主義に固有な交換の特殊形態は恐慌の
影響を加重するものではあるが、然しその最も深い原因は生産の領域に存する。」然らば此の二つの、一見して互
に矛盾するところの見解は如何にして統一されるのであるか。換言すれば財の世界に於ける不比例乃至過剩生産
は如何にして貸付資本の缺乏にまで現象するのであるか。

今一步立入つて論じよう。ツガンに於ては景氣上昇は産業部門相互間の比例性の恢復をまつて開始されると見
られてゐる。³⁾ 即ち好況中の貨幣資本の蓄積は次の好況を準備するものではあるが、それが運動を開始するために
は豫め財の世界に於ける不比例の清算を必要とする。ところで、ツガンによれば、かくの如くにして始められた
景氣上昇運動は財の世界に於て比例性が維持される間は進行するが、ひとたび比例性が失はれるや不可避的に反
動が襲來する。⁴⁾ かくて恐慌に於て現象し始めた不比例性は沈滞の期間を通じて進行する。かくの如きがツガンの

1) A. Spiethoff; Die Krisentheorien von M. v. Tugan-Baranowsky und L. Pohle, Schmollers Jahrbuch, 1903 II, S. S. 353. 尙參照 A. Aftalion; op. cit. p. 244.

2) Tugan, Studien, S. 34.

3) Tugan; Studien, S. 243. 邦譯, p. 259.

財の世界に於ける變動の分析である。然し乍ら此の財の世界の運動については何ら論證なく、更にそれと貨幣側の運動との相互的關係も分析されてゐない。例へば、比例性の喪失乃至部分的過剰生産と貸付資本の缺乏とは如何にして同時に發生し得るか、といふが如き決定的問題に對してツガンの理論は完全に黙して語らないのである。

かくて當面の問題たる貯蓄學說について云へば、「歴史的部分が豊富であるに拘はらず、その理論的部分は、極めて抽象的にしか、極めて僅かしか、説明さるべき具體的現象に向けられてゐない」といふシュピイトホフのツガンに對する一般的批評は此の場合にも適切に妥當するものであり、更に此の點について貯蓄學說に「最も體系的な形態」⁴⁾を與へたことは、シュピイトホフの貢獻と考へらるべきである。此の意味に於て貯蓄學說の問題は、次にシュピイトホフの景氣理論を詳論した後に於てこれを論ずるであらう。

- 4) Tugan; Studien, S. 249. 邦譯、p. 267.
- 5) A. Spieteoff; Die Krisentheorien von M. v. Tugan-Baranowsky und L. Pohl, Schmollers Jahrbuch, 1903 II, S. 355.
- 6) A. Aftalion. op. cit p. 252.